

## 供若菜

つらすして延光朝臣につかはしける、左大臣、松もひきわかなもつますなりぬるをいつしか櫻  
はやもさかなむ、院の御かへしまつにくる人しなければ春の野のわかなも何もかひなかりけ  
り、小松引になんまかると人のいひければ君のみや野べに小松を引にゆく我もかたみにつま  
むわかなを宇多院、子日せんと有ければ式部卿のみこをさそふとて行明親王、故郷の野べ見に  
ゆくといふめるをいざ諸ともにわかなつみてむ、子日しにまかりける人のもとに、おくれ侍り  
てつかはしける、みつね、春の野に心をだにもやらぬ身は若菜はつまで年をこそつめと有、五首  
ことぶく若菜をよみて、二首は小松をよまず、正明これにこころづきて、子日に若菜をみづか  
らもよみ、人にもおじへてよまする事なり、七種の菜はすくなすべしろなど、はたがへる物也、  
年中行事秘抄にや有けん、白河院仰に、松を添て奉るはひがごと也、菘と書てなとよむ也との玉  
へりし事みえたりき、其頃はやう松はくはざりし也。略○中今時好事のひと、子日に野外に遊びて  
小松はひけど、何にすべき物とも玄らず、俊成卿歌にさなみや玄がの濱松ふりにけり誰世に  
ひける子日なるらん、とあるは引栽ことなれば、はやう實をうしなひし也。

## 古今要覽稿 時令 若菜わかな

正月子日に若菜のおもの調して奉りし事は嵯峨天皇の弘仁四年を始とす。

内宴記 河海抄引 これは唐の大宗の舊風にならひ給ひしと上同いへり、それより代々の天皇

も、つぎつぎに此事を行ひ給ひしなり、おほよそ若菜とは皆人食ふべき春草の若苗をさしてい  
ひし名なれども、その食ふべき春草の中にも、初春の頃に生出るものは、薺、をはぎ、芹などのたぐ  
ひにて、今いふつまみな、或はうぐひすなの類にてはあるべからず、その若菜をつむには、人々野  
邊に出て子日するとて、小松を引けるよすがに、此菜をもつめばなり、その故に寛平八年、宇多天  
皇の雲林院に行幸し給ひし時の序文に、倚松樹以摩腰、習風霜之難犯也、和菜羹而啜口、期氣味之  
充調也と 菅家文草いひ、藤原元真が歌にも、霞たづ野邊の若菜をけふよりぞ松のたよりにと家いひ、